JIJI PRESS 時事通信社
コメントライナー
第7117号　2020年11月19日（木）

# 見事！カマラ・ハリス氏のスピーチ

言の葉OFFICEかのん代表　**川邊　暁美**

## ◆何が彼女を大きく見せたのか

純白のパンツスーツに身を包み、颯爽とカメラの前に登場したカマラ・ハリス氏。バイデン次期大統領の勝利宣言を前に行われた次期副大統領としてのスピーチは、鳴りやまない拍手と歓声を満面の笑みで受け止め、支持者と喜びを共有するところから始まった。

自信に満ち溢れた立ち居振る舞いを見ながら、ミシェル・オバマ氏のように身長は180センチくらいかと思ったのだが、157センチと知って驚いた。筆者と同じである。

だが、とても自分と同じ身の丈の女性が話しているようには見えなかった。何がそんなに彼女を大きく見せているのか。まず、姿勢。上半身がぶれない。足元にしっかりと重心を置いているのだろう。これは安定した張りのある発声のためにも大切なことだ。そして、自分を大きく見せるジェスチャーを効果的に取り入れている。

演台では常に胸を張り、ゆったりと中央で手を重ねる、もしくは肩幅よりやや広い位置に手を置くのがホームポジションで、ときに右手を握り、前に突き出し、指先まで伸びた手で左右を差すときなども動きは流れるように自然で、その笑顔同様落ち着いたおおらかさがあった。

日本の女性はよく肩をすくめ、両手を小さく握り込んでマイクを持つが、その姿が自分をより小さく、お邪魔にならない程度の存在にしか見えないことに気づいた方がいい。

## ◆最もインパクトを残したフレーズ

ハリス氏がスピーチの冒頭で、2020年7月に亡くなった下院議員ジョン・ルイス氏の「民主主義は状態ではなく、行動である」との言葉を引用し、「民主主義は私たちがそのために戦い、守る意志があってこそ」と、「私たち」メッセージを多用しながら、愛国心に働きかけたのは、聴衆との一体感、絆をより強固なものにしたに違いない。

続いて、バイデン氏と自身の家族に感謝を示した後、19歳でインドから渡ってきた母親の話へ。個人の思いや経験を語ることは、話し手への共感を呼び、信頼を高める。

さらに、そこから女性の権利のために戦ってきた何世代にも及ぶ女性たちへと思いを膨らませ、最もインパクトを残したのは、アメリカの少女たちに向けて可能性を語ったあのフレーズだ。

「ジョーはこの国に残る最も堅固なバリアーを打ち砕き、女性を副大統領候補に選んだ、私が最初の女性の副大統領になるかもしれないが、最後ではない」

## ◆日本の女性にも良い刺激に

そこにいる誰もが4年前、「私たちはあの高いガラスの天井を打ち砕くことができなかった。しかし、きっと誰かがいつの日か、私たちが思うより早くかなえてくれるだろう」と言ったヒラリー・クリントン氏の敗北宣言を思い起こしたことだろう。

この日、ハリス氏が身に付けていた白は、アメリカの女性参政権運動のシンボルカラーと言われている。今回は最も高い天井を破ったわけではないが、そこに一番近い位置まで登りつめた初めての女性だ。スピーチの最後は副大統領としての決意を述べ、短いフレーズを重ねながらバイデン氏紹介へとテンポよく盛り上げていった。見事としか言いようがない。

女性のトップやリーダーのスピーチレッスンの際に、自分を控えめに見せる声や話し方、立ち居振る舞いが身についてしまっているのが気になることがある。ハリス氏が日本の女性にとっても良い刺激となることを望みたい。

（かわべ・あけみ）

◆監修◆ 内外情勢調査会　◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8　TEL：03-6800-1111（代表）
この記事に関する問い合わせは、**時事総研（03-3546-2384）**まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003